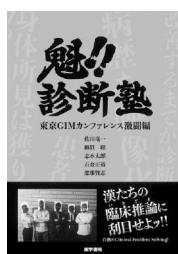


書評

[評者]
矢吹 拓

独立行政法人国立病院機構
栃木医療センター内科医長



魁!! 診断塾

東京 GIM カンファレンス激闘編

佐田竜一，綿貫 聡，志水太郎，
石金正裕，忽那賢志 著

● A5 頁 272 2017年9月

定価：本体 3,500 円＋税

[ISBN978-4-260-03194-3]医学書院刊

『魁!! 男塾』(集英社)が連載されたのは1985～91年。まさに私の小学生時代を共に過ごした名作でした。当時、『週刊少年ジャンプ』でまず読むのは『ドラゴンボール』でしたが、時間をかけて読むときは『魁!! 男塾』の門を叩いたのを覚えています。当時、そのあまりの人間びっくりショー的な強烈さに仰天した漫画の1つでした。本書はその世代を過ごした中堅医師たちの熱い思いがほとばしる、会話形式の臨床推論の指南書になります。

症例が全部で24例提示されていますが、まずその冒頭で伝授される「診断塾 塾生心得九カ条」は必読です。どの心得も素晴らしく、ここで九カ条全て箇条書きにしてもよいくらいですが、その中でも特に病歴を重視する姿勢が共感できます。例えば第三条の「病歴を映像化せよ!」などは、評者も普段の臨床やカンファレンスで意識することであり、症状の発症機転(Onset)や詳細な経過を、映像化できるほど詳細に確認していくことの重要性を実感しています。痙攣や失神など、ほぼ病歴で勝負がつくような疾患・病態も多く、とに

かく困ったら病歴確認をと考えています。また、第四条では「患者の主訴1つより、illness scriptで考えるべし!」と主訴のみにアンカーしてしまうような認知バイアスへの対処も促しつつも、第八条で「経過が複雑で困ったときは、患者の解釈モデルに着目せよ!」と患者に聴く姿勢の重要性にも触れています。この部分だけで山ほど語れそうです。

症例提示自体も、会話形式のやり取りに飽きさせない工夫が随所にあり、結構診断が難しい症例も多いのですが、あっと言う間に読めてしまうのも良い点でしょうか。ほけと突っ込みなど登場するそれぞれの先生のキャラが立っていて、かつ必要な鑑別やパールが満載です。それから、「あとがき座談会」で症例の内容なども振り返っているのですが、この内容が非常に自己省察的で、それぞれの先生方の本音を垣間見ることができました。多くの先生方の手に本書が届くことを願っています。

最後になりましたが……なぜBEAT CRUSADERS?